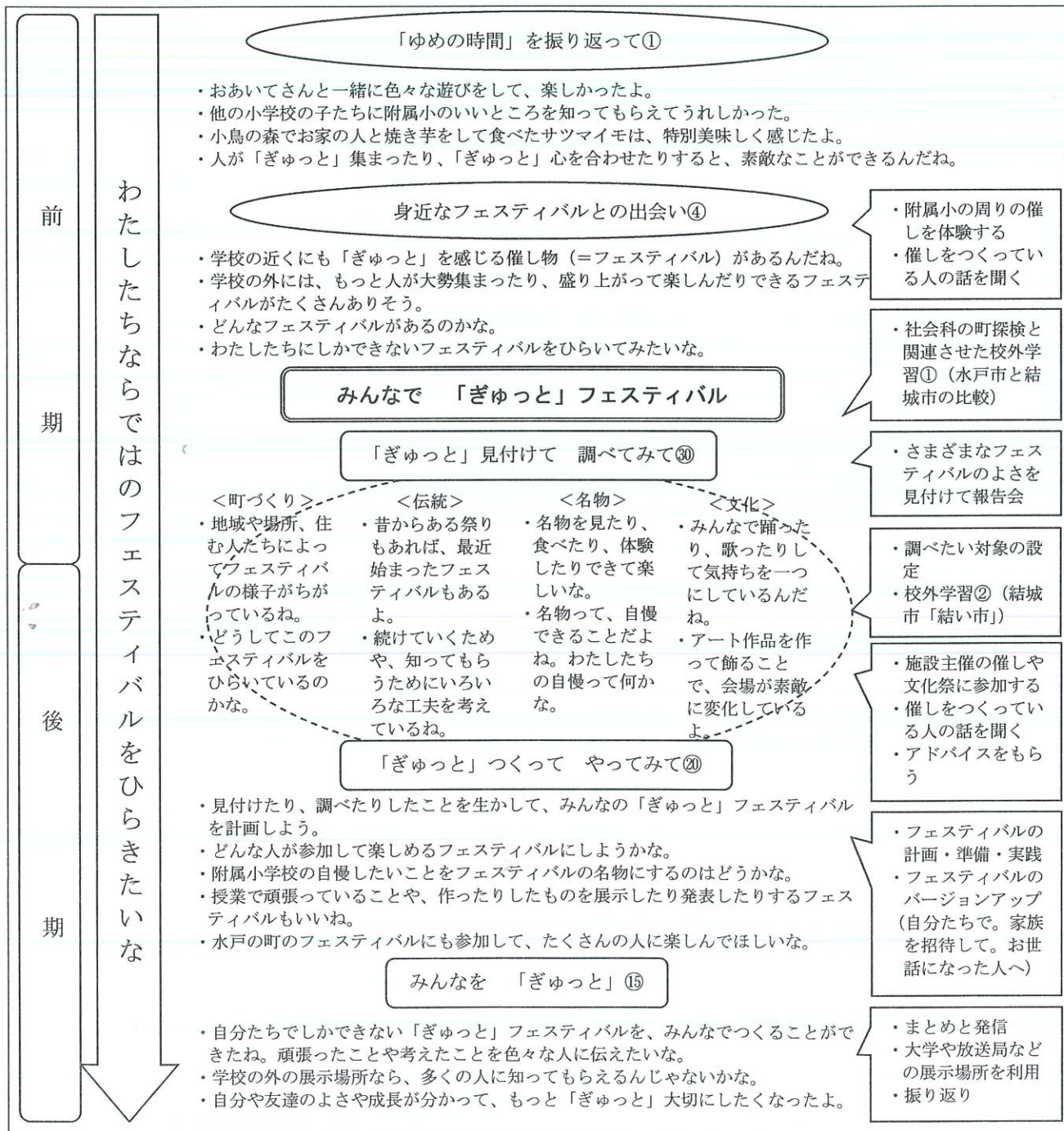


1 テーマ みんなで 「ぎゅっと」 フェスティバル

2 めざす子どもの姿

- 協働し課題を達成する様、自他を尊重する態度、対象に焦点を当てていくことを「ぎゅっと」という合い言葉で表し、地域の祭りやイベントを体験したり調べたりすることを通して、進んでもの・こと・人とかかわる中で、やってみたいことを見付け、自分たちならではのフェスティバルについて互いの考えを深め合いながら活動をつくり出す。
- 気になるテーマに焦点を当てて、体験して学んだことを生かした『「ぎゅっと」フェスティバル』を仲間と計画したり、調べて考えたことを、伝えたい相手に応じて表現方法を工夫してあらわしたりする。
- 繰り返し対象とかかわったり、計画、準備、実践してきたことを振り返り、次のフェスティバルで改善したりすることを通して、自分たちの成長に気付いたり、お互いのよさを認め合ったりしながら、活動を広げていく。

3 活動計画 (70 時間扱い)



4 実践報告

〈ひびきの立ち上げ〉

4月下旬、子どもたちは、学校の通学路である水戸駅で、こいのぼり祭りを知らせる旗とペDESTリアンデッキに飾られたこいのぼりに出会った。子どもたちと話していると「竜神大吊橋の鯉のぼりまつりに行ったことある」「今度笠間の陶炎祭りに行くんだ」といった発言が出てきた。さらに話していると、子どもたちの中に、「どうして、フェスティバルを開くのかを知りたい」「どんな人が関わっているのかな」という疑問が生まれ、実際に話を聞きたいという思いが芽生えた。そこで、結城市で街を舞台にした「結びプロジェクト」を手掛ける野口さんに話を聞くことにした。子どもたちは、インタビューをしながら、フェスティバルを通して結城市をもっと盛り上げたいという野口さんの思いに触れ、「自分たちも、附属小学校を盛り上げるフェスティバルをつくりたい」「3年生みんなの力をぎゅっと合せて楽しいフェスティバルをつくりたい」といった思いを高めていった。こうした、子どもたちの思いをもとに、「みんなでぎゅっとフェスティバル」というテーマを設定した。

〈もっとぎゅっと調べたい〉

子どもたちは、他にはどのようなフェスティバルがあるのか、水戸を中心に調べていった。調べていく中で、県立図書館での「読書フェスティバル」や水戸市植物公園での「サマーフェスティバル」、千波湖での「ちびっ子広場」など各地でイベントが催されていることがわかった。そこで、県立図書館と水戸市植物公園に実際に行き、話を聞くことにした。(写真1)話を聞く中で、「もっとたくさんの人に魅力を知ってもらいたい」、「フェスティバルをつくるためには、仲間と同じ目標をもつことが大切である」といった共通の思いや考えがあることを捉えていった。また、フェスティバルにも体験して楽しんでもらうものや展示物など見て楽しむものなど、多くの方法があることに気付いていった。子どもたちは、体験グループ、ものづくりグループ、ショーグループに分かれて附属小学校の魅力伝えるためのフェスティバルをつくり始めた。

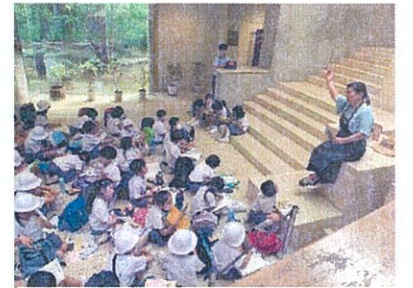


写真1 フェスティバルについて話を聞く様子

〈もっとぎゅっと知りたい〉

フェスティバルの準備をする中で、自分たちがつくった企画をお互いに発表し合った。すると子どもたちから「もっと自分たちの企画を良くするためにはどうすればいいのかな」「他にはどんな準備物が必要なのかな」といった疑問が生まれてきた。そこで、11月に結城市で行われた「着物 day ゆうき」の準備の様子を見に行くことにした。(写真2)結城市では、それぞれのグループに分かれて、準備の手伝いを行ったり、結城市の街並みがフェスティバルにどのように活用されているかを調べたりしていった。



写真2 結城市のフェスティバルの準備を手伝う様子

〈みんなでぎゅっとフェスティバルをつくりたい〉

結城市での活動をもとに、子どもたちは、来てもらう人に分かりやすいように旗をつくらしたり、学校の魅力を伝えるために、校舎やグラウンドの地形を利用した体験活動をつくらしたりするなど、活動にこだわりが生まれてきた。活動後「自分たちの活動で楽しんでいるのを見て、自分も楽しかった」、「体験した人から楽しかったという言葉で自分もうれしくなった」など、相手の姿や言葉から自分たちの活動に価値を見出し、充実感や達成感を得ている様子が見られた。(写真3)



写真3 グループ毎の発表をしている様子

これらの活動を通して、子どもたちは、「身の回りの自然や場所の魅力をもっと知りたい」、「お世話になった人にできたことを伝えたい」といった思いを高めていった。学校の魅力に「ぎゅっと」焦点を当ててお祭りという形で発信したことで、自分たちの周りのもの・こと・人に興味を広げる結果となった。そして、仲間と共に、「ぎゅっと」協力し、自分たちの「やってみたい」ことについて計画を立て、見通しをもち自分たちの力をつくり上げたことで、自分自身の成長に気付く子どもたちが多くいた。これからも、自分や仲間の思いに「ぎゅっと」寄り添い、「やってみたい」を実現していった。 (文責：小河 純)